

4 および 5 において上層の前線の強化の例を示した。また 6 は上下二つの前線が重なって前線帯が強化発達する例であり、これは大雨の機構について提出されたいろいろの概念がほぼ同一の概念であることを示している。

最後に本調査に当って御便宜を与えていただいた藤本予報課長並びに援助をいただいた諸氏に感謝します。

文 献

- 1) Means, L. L., 1954: On Thunderstorms Forecasting in the Central United States, Month. W. Rev. **80**, 162—189.
- 2) Means, L. L., 1954: A Study of the Mean Southerly Wind-maximum in Low Levels associated with a Period of Summer Precipitation in the Middle West, Bull. Amer. M. S. **35**, 166—170.
- 3) 三沢甚一, 1953: 鳥根県の大雨について, 昭和 28 年度大阪管区研究会.
- 4) Newton, C. W., 1954: Frontogenesis and Frontolysis as a Three Dimensional Process, J. Met. **11**, 449—461.
- 5) 大谷東平, 1946: 集風線の研究について, 広島予報時報, **5**, 1—4.
- 6) // 1954: Converging Line of the North Trade Wind and Converging Belt of the Tropical air Current, Geoph. Mag. 251—122.
- 7) Reed, R. J. and F. Sanders, 1953: An Investigation of the Development of a Mid-tropospheric Frontal Zone and its associated Vorticity Field, J. Met. **10**, 338—349.
- 8) Reed, R. J., 1955: A Study of Characteristic Type of Upper-level Frontogenesis, J. Met., **12**, 226—237.
- 9) Sanders, F., 1955: An Investigation of the Structure and Dynamics of an Intense Surface Frontalzone, J. Met., **12**, 542—552.
- 10) 高橋浩一郎その他, 1954: 梅雨末期の豪雨の解析, 気象集誌, **I**, **32**, 281—289.
- 11) 吉野格, 1954: 昭和 27 年 7 月のコールドトラフと大雨について, 昭和 29 年大阪管区気象研究会.

国際地理学会議開かる。

1957 年 8 月 29 日～9 月 3 日, 国際地理学会議が東京と天理において, 日本学術会議と国際地理学連合の共催で開かれ, 外国の学者数十名, 国内の学者約 400 名が連日討論を重ねた。日程は以下の通りである。

8 月 29 日 (木) 午前—東大講堂にて開会式・特別講演。午後—学士会館にて部会 (地形学・総合開発・産業構造・土地利用)。8 月 30 日 (金) 午前—学士会館にて部会 (気候学・工業化・地誌・その他)。午後—東京の現地討議。8 月 31 日 (土) 午前—学士会館にて東南アジアシンポジウム。午後—川崎の現地討議。9 月 2 日 (月) 午前—天理大学にて部会 (地形学・集落・土地利用・人口)。午後—奈良と大和盆地の現地討議。3 日 (火) 午前—部会 (気候学・陸水学・地誌とその他), 閉会式。この間, 別室では地図の展示が行われていた。

提出された論文の数は 130 編余りに達したが, そのうち気象学・気候学関係のものは次の通りである。

- 前モンスーン季のインドと最近の天気変化 (S. B. Chatterjee)
- 中国の農業気候地域 (陳正祥)
- 台湾における台風と米作 (覚民謝)
- 中国本部の自由大気気候研究 (蘇福堃)
- 台湾における気候型に関する研究 (王鐘麒)
- 古記録よりみたる極東の気候変動 (荒川秀俊)

- 気候的にみた中緯度地帯の農業の有利性 (福井英一郎)
- 蒙古における有史以来の気候変化 (保柳睦美)
- 都市内の温度分布におよぼす緑地の影響 (中原孫吉)
- 北半球における 8 月平均気圧, 気温の 7 年週期変動 (小沢正・藤田敏夫)

- 日本の気候と気象災害 (斎藤鍊一とその協力者)
- いわゆる東岸気候について—第 2 報 (佐々倉航三)
- 局地気候と都市気候 (関口武)
- 日本における気候景観 (矢沢大二)
- 小地形の影響を受けた地表風の微気候学的研究 (吉野正敏)

会議の前には 5 班に分れてそれぞれ約 1 週間の見学旅行があった。このほか, 東南アジアシンポジウムで発表された 5 編の論文は,

- 東南アジアの地理学的諸問題 (飯塚浩二)
- 東南アジアと熱帯 (P. Gourou)
- モンスーンとその東南アジアの人々におよぼす影響 (S. B. Chatterjee)
- 東南アジアの米作の諸問題 (F. H. G. Dobby)
- 東南アジアの諸国の経済発展に関する二三の考察 (安芸峻一)

以上の通りで, 会議は極めて盛会, 国際地理学連合ばかりでなく, 日本の地理学界にとって多大の成果を収めた。(なお会議の詳しい報告は別に掲載する予定)